

西アジアの歴史を紐解くことは、 現代、そして未来を創造していくための 学びかもしれない。

① 西アジアの歴史に、現代の国際社会を見る。

歴史学のなかでも特に16～19世紀の西アジア、現代でいえば中東地域を主に研究しています。当時、東地中海一帯にスンナ派を採択したオスマン朝があり、現在のイランにあたる位置にシーア派を採択したサファヴィー朝がありました。たとえば、この2国間周辺の史実を知ることによって、現代の中東やイスラーム圏における諸問題の淵源を見ることができるのです。



② 世界初となるイランからイラクへの シーア派の聖地巡礼を記し、受賞。

私を受賞させていただいたのは、19世紀のイラン・イラクを中心とした、シーア派の聖地巡礼に関する書です。このテーマを体系的にまとめたものは世界初であると自負しています。

当時、イラクのシーア派の聖地は、対立するスンナ派の支配下にはありましたが、イランの人々のあいだでは聖地巡礼が一大ブームでした。ただ、長旅の苦勞もさることながら、巡礼するには異国に向かうことになるため、国境の検問や検疫で嫌がらせを受けるなど大変困難なものとなっていました。しかし、これによりシーア派のアイデンティティはより強固なものとなり、ますます団結力を高めていきました。また、そのような聖地巡礼も、宗教的な意味合いだけでなく、観光や娯楽の面での楽しみもあったことがわかったのです。

③ 歴史を紐解きながら、常に現代を見ている。

現代の中東は、残念ながら争いごとでの注目度が高い地域です。ただこの争いも、歴史を知ることによってなぜこうした現状が生まれたのかを理解することができます。歴史を学ぶことは現代社会を知ることとも言えるのです。もちろんこれは西アジアに限ったことではありません。

世界にはもともとそれぞれ違った考え方や宗教心を持った人々が民族を超えて各地に混在していました。これをひとと言でいうと、「多様性」です。歴史を紐解くと、さまざまな国の諸問題はこの多様性を受け入れずに、人々を「ひとくりにしていること」に起因していることが多いように思えます。歴史を通じて、人間や社会の多様性への理解を深めていくこと。これは、現代を生きる私たちにとっても、非常に大切なことなのではないかと考えています。

④ 西アジア史の研究は、 世界的な可能性に満ちている。

歴史を研究する際「解釈はすべて人のバイアスがかかっている」という点は常に意識しています。過去の出来事は1つなのに、解釈は人の数だけ存在するのが歴史です。注意が必要であるとともに、ある意味非常に自由かつおもしろい学問であるとも思います。その人の解釈そのものがオリジナリティとなるためです。

西アジアの歴史は特におもしろいと思います。なぜなら、数千年の歴史をもつことに加え、日本人だけでなく欧米人にとっても外国（異国）の歴史であり、未開拓の分野が多くあるなど、世界的に見ても可能性が大きいからです。このおもしろさをより広く伝えていくためにも、今後は執筆活動にさらに注力していきたいですね。



◆第1回・2012年度受賞 人文科学部門

守川 知子 東京大学 大学院 人文社会系研究科 准教授
(受賞当時:北海道大学 大学院文学研究科 准教授)

《受賞研究》イラン・イスラーム社会史 —シーア派イスラームの聖地巡礼に関する歴史学的研究を中心に